

氏名	吉 岡 伸 高
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第3524号
学位授与年月日	平成10年12月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当者
学 位 論 文 名	Cerebral Revascularization Using Omentum and Muscle Free Flap for Ischemic Cerebrovascular Disease (虚血性脳血管障害に対する血管柄付遊離大綱および筋肉移植を用いた 血行再建)
論 文 審 査 委 員	主 査 教 授 中井 義明 副主査 教 授 白馬 明 副主査 教 授 山野 慶樹

論 文 内 容 の 要 旨

【目的】脳の関節的血行再建術は、動脈硬化性の虚血性脳血管障害においては、良好な側副血行ができたとする報告が少なく、この方法は、これまで主としてもやもや病の治療において用いられている。血管吻合による遊離組織移植の手技を用いて虚血性脳血管障害に対して間接的血行再建術をおこない、この方法の有効性について検討をこなした。

【方法】1993年から1995年の期間に血管柄付遊離大綱および筋肉移植を用いた方法で治療をおこなった成人のもやもや病3例と動脈硬化性の虚血性脳血管障害の患者7例を対象とした。そのうち大綱移植を8個におこない、筋肉移植を5例におこなった。筋肉移植に用いた筋肉は広背筋を3側に前鋸筋を2例に用いた。脳血管撮影とダイアモックス負荷脳血流検査を全例で術前術後におこなった。全例の術前の脳血流検査では、脳循環予備能の低下を示しており、能CTでは梗塞巣は認めないが、小さいものであった。能血管撮影では主幹脳動脈の閉塞または狭窄がみられた。手術は形成外科的手技を用いておこない移植組織の栄養動静脈を浅側頭動静脈と端々吻合した。経過観察期間9カ月から35カ月で平均23カ月であった。

【結果】術後の脳血管撮影では、もやもや病症例の全例と動脈硬化性の虚血性脳血管障害の症例における7例中4例では、移植組織からの側副血行が認められた。また術後の脳血流検査では全例に脳循環予備能の改善がみられた。生存している9例は全例その後能虚血発作なく経過している。合併症としては、1例が術後3日目に心筋梗塞で死亡し2例で術後に脳梗塞を生じた。また1例で移植大綱の血流不全から、創部感染を生じた。

【結語】血管柄付遊離大綱および筋肉移植を用いた間接的血行再建術は、もやもや病以外の動脈硬化性の虚血性脳血管障害の治療法として症例によっては選択肢の一つになると考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

動脈硬化性の虚血性脳血管障害の治療に脳の間接的血行再建術が行われる症例があるが、この方法で良好な側副血行ができたとする報告が少なく、この方法は、これまで主としてもやもや病の治療において用いられている。今回血管吻合による遊離組織移植の手技を用いて虚血性脳血管障害に対して間接的血行再建術を行い、この方法の有効性について検討をおこなった。

対象は1993年から1995年の期間に血管柄付遊離大綱および筋肉移植を用いた方法で治療をおこなった成人のもやもや病3例と動脈硬化性の虚血性脳血管障害の患者7例計10例であり、そのうち大綱移植を8例

におこない、筋肉移植を5例におこなった。筋肉移植に用いた筋肉は広背筋を3側に前鋸筋を2側に用いた。手術は形成外科的手技を用いておこない、移植組織の栄養動静脈を浅側頭動静脈と端々吻合した。経過観察期間は9ヶ月から35ヶ月で平均23ヶ月であった。脳血管撮影とダイアモックス負担脳血流検査を全例で術前術後におこなった。全例の術前の脳血流検査では、脳循環予備能の低下を示しており、脳CTでは梗塞巣は認めないが、小さいものであった。脳血管撮影では主幹動脈の閉塞または狭窄が認められた。

術後脳血管撮影を行った11例では、もやもや病症例の全例と動脈硬化性の虚血性脳血管障害の症例における7例中4例では、移植組織からの側副血行が認められた。また、術後の脳血流検査では全例に脳循環予備能の改善がみられた。生存している9例は全例その後脳虚血発作なく経過している。合併症としては、1例が術後3日目に心筋梗塞で死亡し、2例で術後に脳梗塞を生じた。また1例で移植大綱の血流不全から創部感染を生じた。

本論文は血管柄付遊離人綱および筋肉移植を用いた間接的血行再建術が、もやもや病以外の動脈硬化性の虚血性脳血管障害の治療法として症例によっては選択肢の一つであることを証明したものである。よって著者は博士（医学）の学位を授与されに値するものと判定された。